

新潟の庭園は文化の表看板

～にいがた庭園街道に思う～

株式会社要松園コーポレーション代表取締役
にいがた庭園文化交流協会副会長

土沼 隆雄



はじめに

新潟地方の庭園については、以前、『新潟県の庭園（下越・佐渡地区）1988』、『新潟県の庭園（上越・中越地区）1990』として新潟県文化財緊急調査報告書¹⁾が県教育委員会より発行されているが、これは上・中・下越・佐渡地区の主だった庭園の所在と簡単な庭園紹介にとどまるなど、主に内部資料として扱われ市民に公表されなかった。

県内作庭家に関係した活動では田中泰阿弥研究会がある。田中泰阿弥（本名泰治、柏崎）は、室町時代に傑出した同朋衆の阿弥号を冠し、銀閣寺・洗月泉滝石組などを発掘した。昭和初期から新潟の名士や豪農の庭園整備を行い、貞観園、伊藤（文吉）家庭園、清水園、渡邊家庭園などが代表作。この人物に注目し詳細な記録や書簡の解説、現地調査で緻密な庭園図を作成

して庭園構成とその特徴を読み解き、2冊の著書『孤高の庭匠田中泰阿弥（1999）、（2005）』²⁾にまとめている。

この著書が出版されるまで、県内外の専門家ですらその名前や偉業を知る人は少なかった。

さて、近年、新潟地方の庭園が地元新聞その他のメディアで取り上げられることが多くなってきた。その発端は、2005年、旧齋藤家別邸（新潟市）³⁾の売却が報じられ、市民有志で「旧齋藤家夏の別邸の保存を願う市民の会」が組織されて、保存の請願書が新潟市に提出されるなど一般公開も何度か行われて市民の大きな反響を呼んだことで、後に公有地化され、庭園は国の名勝にも指定（2015年）された。

加えて2014年、新潟地方の145庭園を扱い、地域性の観点から土地の歴史や自然環境条件を整理して庭園の空間形態や環境要素相互の関係とその特色を論じた『越後／新潟の庭園—地方の消えゆく庭園を守

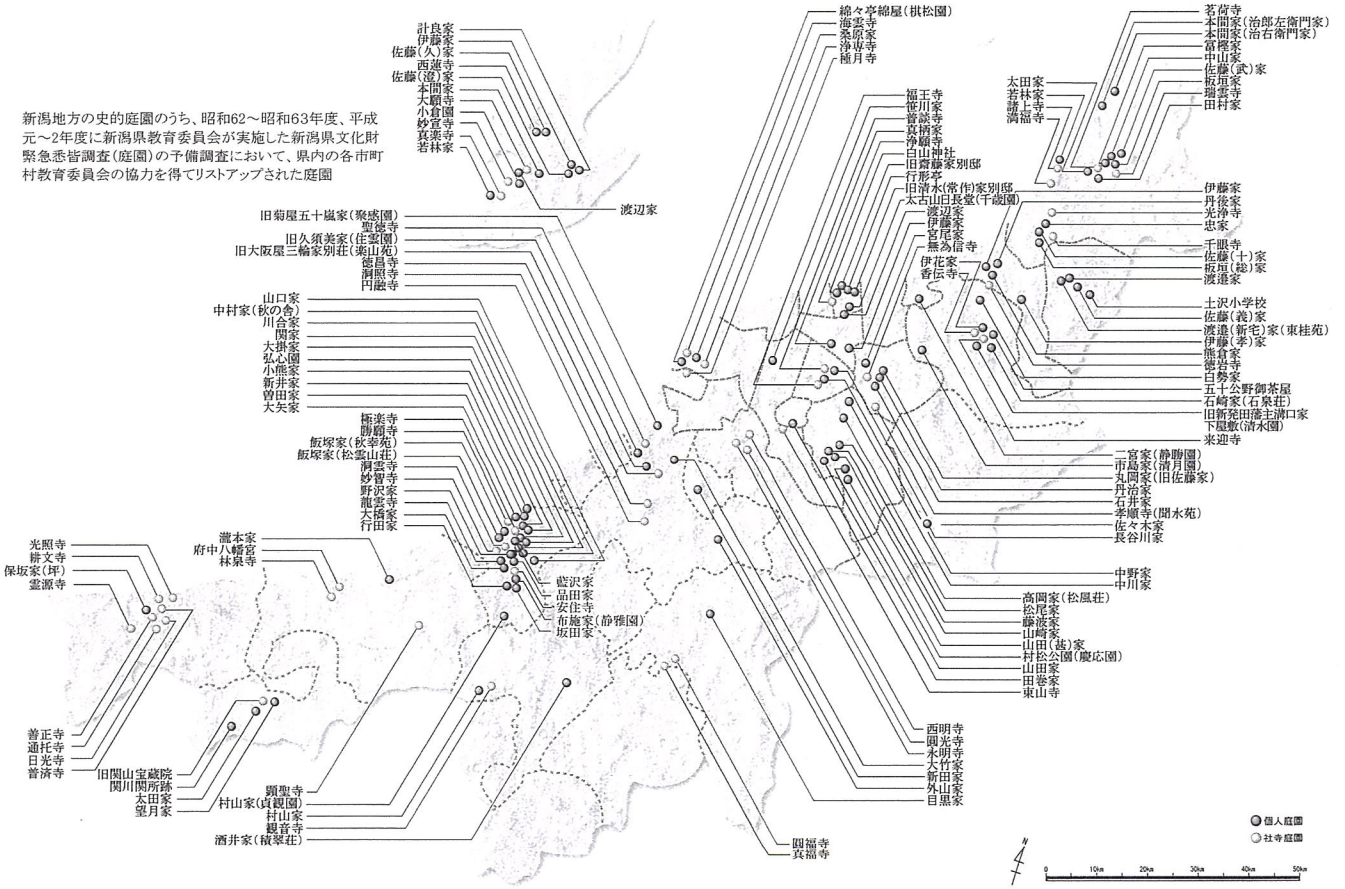


図1 新潟地方の庭園分布図（1996）

る⁴⁾が出版され、この頃からシンポジウムや多くの研究論文⁵⁾が発表されるなど、徐々に新潟地方の庭園が話題にのぼることが増えてきた。

一方、海外で新潟の庭園の特色や諸活動が発表されたこと(2012、2016)⁶⁾や県内の民間団体との交流を通じて、海外の庭園愛好家(アメリカ、デンマーク等)がたびたび新潟を訪れるなど⁷⁾、総じて全国に先駆けて地方地域の庭園が注目される足掛かりにもなった。

にいがた庭園街道

このような背景のなかで、にいがた庭園街道は村上地内を起点に国道290号線に点在する庭園を中心に歴史文化施設を廻る企画として誕生し、加えて近在の観光地と結び付き、その土地の新潟らしさを見て味わう観光ツアーとして期待されている。これらは、にいがた庭園街道ネットワークが運営し、庭園ガイド養成や日本庭園の見方など各種講座も開講している。

この事業は、広く県内外の旅行者に注目されつつある魅力的な観光振興として、今年、創設された国の「ガーデンツーリズム(庭園間交流連携促進計画)」登録制度で、全国6ヶ所が選ばれたそのなかの一つとして登録された。

越後／新潟の庭園⁸⁾

新潟県は300kmを超える海岸線を有し、県境は北東側から南西側にかけて2,000m級の山々を中心とした山岳地帯で、この山岳地帯を源とする多くの河川が県内を走り日本海に流れ込んでいる。また県央部は広大な平野地帯であるなど地形的にみて多様な地域である。

新潟地方の庭園は、豪農と呼ばれる地主の暮らしと深い関わりを持ってきた。地主たちは江戸時代から米の収穫高を増やすために積極的に新田開発を進め、稲作経済で多くの富を得た。その財力によって広大な土地を所有し、建物を敷地の中央に構えて周辺に大庭園を造った。この庭園の特徴として①面積が大きいこと、②水利用があること、③周りを木々で取り囲むこと、などが挙げられる。当時、庭園文化の中心は江戸(東京)というよりも京都であったため、建物の大半は日本の伝統様式の一つで、京都でよく見られる数寄屋造りや書院造りを参考にしたものだった。庭園の築造も庭石、石灯籠はもとより、庭師を京都方面から招聘するなど、京の雅な文化に強い憧れを持っていた。そのため豪農の庭園は自然を取り込むというよりも石灯籠、飛石、蹲踞、垣などの景物、茶室などの添え物

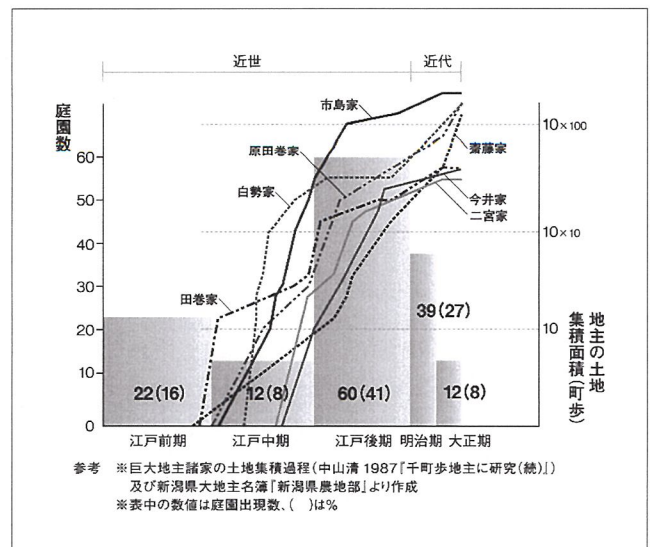


図2 庭園の出現数と地主の土地集積推移表(1996)

による豪華趣味的な庭園だった。

なお庭園形成のピークは、地主が江戸後期から幕末期にかけて隆盛し、ほぼ土地集積を成し遂げた明治期(20年代)に重なる(図-2)。

立地からみた新潟地方の庭園の特性⁹⁾

山地型地域：庭園の多くは山を背負った後背斜面地にあつて、清水を利用した融雪のための池泉を掘り、裏山全体を巧みに築山利用している。つまり斜面や山樹、水利用など庭園化しやすい条件が建物裏手に既に存在していた。また、この地域は社寺庭園が多い。これらは都市化を免れ、かつ檀家・民衆らが長いこと継続して庭園管理を行って現在まで維持されてきたもので、他地域と比べて庭園が残り得る状況が潜在的にあった。

平地型地域：上越市、新発田市、中蒲原郡のほか北蒲原郡のほぼ全域に庭園がまともっており、長岡市近郊でも外山家庭園をはじめ、住雲園、聚感園、楽山苑などの名園がある。北蒲原郡では清水園、伊藤(文吉)家、二宮家など大規



写真1 今板温泉湯本館庭園
建物裏手斜面地を築山に見立て、その中腹より水を落とした池泉庭園。派手さがなく地被は自然で全てが自生種、大正初期の築庭(山地型地域)



写真2 二宮家庭園(静勝園) 主座敷からの眺めは広大で、前方の弁天淵を取り込んだ借景庭園。築庭は嘉永年間頃(平地型地域)

模な屋敷に付設して庭園が築かれ、京都方面から鞍馬石、貴船石、加茂川石、また紀州青石、伊予石や地元の海老ヶ折石、赤玉石などの銘石も多数運び込まれ、高価で技巧的な庭園が造られている。この地域は地形的には広大な平坦部で、治水・灌漑条件が整いやすく、農業技術の改良改善や水稲品種の改良などの情報力もあり、人力も大量に集積できたため稲作の中心地で大地主が最も多い地域だった。

沿岸型地域：海岸にごく近いところでは強烈な海岸気象の影響からか庭園がほとんど築造されていないが、海岸沿いの窪地や海岸裏手の山斜面地や丘陵地では特異的に庭園が少数存在している。一方、元禄期の頃から主に海運による流通基盤が確立していた新潟湊を中心とした商業地、新潟町では、明治期に入ると近代商・工業その他の事業を営む高所得者層らが所有する屋敷、別宅そして料亭など京都の町屋形式とは少し異なる在来型住宅から独自に変化した建物に付設し、京都色から離れた中・小規模の庭園が多く造られた。(平成大合併以前の地域区分)



写真3 浄専寺庭園 本堂と庫裡書院間にある枯山水で、東西それぞれに島を設けた清楚な庭園。築庭は文政元年頃/新潟県文化財1990(沿岸型地域)

日本庭園の真実性

庭園の前に腰をおろせば、小鳥のさえずりが聞こえ、さわやかな風が頬を撫で、光が差し込み、庭の陰

影を際立たせる。どんなに心を閉ざしていようと、どんなに悲しい思いがあろうと、これらの光景は心に沁み込んでくる。庭園は静謐な時空間なのである。このような人と自然の関係の本質ともいえる「心が解き放たれた自然美の世界」にこそ、これからの日本庭園の真実性(存在価値)があるように感じる。

庭園、特に歴史的日本庭園は残っていることが最大の価値であり、場所(地域性)・人(人智)・歴史(変遷)が折り重なった唯一無二の静寂の美と、その存在意義が社会的に認められることが重要。新潟は食をはじめとする地域資源と重なりやすい環境にある。地域に根差した民間同士の有機的な連携により、我がまちの誇りと感じることであれば、新潟の庭園に対する市民の意識も変わってくる。日本庭園の持つ思想性や美の世界で全てをやるわけではないが、少なくともこのようなことに気づき、新しい時代の新しい日本庭園の価値と進化を新潟から発信したい。

にいがた庭園街道がんばれ!!

補足資料、参考及び引用文献

- 1) 新潟県教育委員会『新潟県の庭園(下越・佐渡地区)』新潟県文化財調査年報第25新潟県文化財緊急発掘調査報告書(1988) / 新潟県教育委員会『新潟県の庭園(上越・中越地区)』新潟県文化財調査年報第26新潟県文化財緊急発掘調査報告書(1990)
- 2) 田中泰阿弥研究会『孤高の庭匠田中泰阿弥』(1999) / 田中泰阿弥研究会『孤高の庭匠田中泰阿弥』(2005)
- 3) 旧齋藤家別邸は、新潟町の近代における社会経済の基盤をつくったとされる三大財閥の一人四代齋藤喜十郎氏が、大正7(1918)年に夏を涼しく過ごすための別荘(迎賓館)。これに付随した庭園は、大正6~9(1917~20)年にかけて築造された。庭園は約1,000坪、もともとの自然地形(砂丘)を利用した池泉回遊式庭園で、作者は東京根岸の二代松本幾次郎といわれているが、弟亀吉の説もある。
- 4) 土沼隆雄『越後/新潟の庭園—地方の消えゆく庭園を守る』東京農大出版会(2014)
- 5) 土沼隆雄「(財)北方文化博物館と米国・箱根財団の姉妹庭園締結に至る経過とその意義」日本造園学会(2013) / 栗野隆他「旧齋藤氏別邸庭園を事例とした近代和風庭園の保存のための調査・計画手法」日本造園学会(2014) / 土沼直亮他「旧齋藤氏別邸庭園における老アカマツの外傷治療・倒伏防止等の措置事例」日本造園学会(2014) / 土沼隆雄「姉妹庭園関係の締結とその意義」日本庭園学会(2014) / 土沼隆雄「郷土造園家が担う庭園マネジメントと国際交流」日本庭園学会(2015) / シンポジウム「自然主義風景式庭園の潮流と旧齋藤家別邸庭園—存在の意味と意義を考える—」日本庭園学会(2015)
- 6) Takao Donuma「Sister Garden Affiliation Agreement Between the Hakone Foundation and Northern Cultural Museum」NAJGA in Denver USA(2012) / Naoaki Donuma「Garden as Regional Resource and Community Nexus」NAJGA in Florida USA(2016)
- 7) 米国サラトガ市民グループ42名(2010) / 造園家(デンマーク・フレソ市)(2012) / 米国サラトガ市民グループ17名(2018) / 北米太平洋園芸協会(米国ワシントン州シアトル市)(2017, 2019) など
- 8) 土沼隆雄『越後/新潟の庭園—地方の消えゆく庭園を守る』東京農大出版会(2014) p22, p31-34
- 9) 同 p40-43